

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	鳥飼 玖美子 印	
自然・人文の別	自然 ・ <u>人文</u>	個人・共同の別	<u>個人</u> ・ 共同 名
研究課題名	文学作品の翻訳の持つ可能性		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・ 博士後期課程2年	齊藤美野 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・ 博士後期課程2年	齊藤美野	
研究期間	2007	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は文学作品の翻訳を題材とするものであり、ドイツロマン主義思想家・作家や現代の哲学者などの翻訳に関する論考から「等価性」、「逐語訳」等の概念について考究し、文学作品の翻訳のもつ可能性として破壊的な性質を挙げた。翻訳という行為が、目標言語や文化、人々のもつ規範に対し与える影響力のことを「破壊性」あるいは「変容の力」と呼び、それについて W. ベンヤミンや、近現代の作家・思想家の論を参照し考察した。また、翻訳の等価性は起点・目標両テキストのどのような対応法に見出されるかという点からも、翻訳が目標テキストや目標言語に対しどのような影響を与える可能性をもつか論じた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[文学作品の翻訳] [逐語訳] [等価性]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

文学作品の翻訳のもつ可能性として、「破壊性」、例えば訳出先の言語(目標言語)を変える性質など、既存の何かを壊し変化させる力があるという考えのもと、その性質がどのようなものか考察した。その際、翻訳という行為を「翻訳」と鍵括弧に入れて捉えることで、ある書記言語が記載されたテキストを別の書記言語へ置き換える行為以外にも含めた「翻訳」行為について論じた。主に、フリードリヒ・シュライエルマッハー(Friedrich Schleiermacher)、ヨハン・W・v・ゲーテ(Johann W. v. Goethe)、テオドール・W・アドルノ(Theodor W. Adorno)、マルク・クレポン(Marc Crépon)、ジャック・デリダ(Jacques Derrida)の5名の論述を参照し、この作家・思想家・哲学者たちが翻訳の性質として何を挙げているか見ていった。

シュライエルマッハーとゲーテは、18世紀から19世紀のドイツに生きたロマン主義者である。両者は文芸翻訳について論じており、翻訳の破壊性は主に訳出先の文化(目標文化)における文学や言語(目標言語)の規範を壊すもの、そして発展させるためのものとして述べられていた。例えばシュライエルマッハーは2種類の翻訳法を挙げるが、文芸翻訳の方法としてふさわしいと考えていたのは、異国の要素をドイツ語及びドイツの文芸に持ち込むことができるほうの方法である。その翻訳法は、翻訳者が原作から得たものと同じ印象を目標テキストの読者に伝えようとするものであり、原作者が自分で訳したような翻訳であると説明されている。(もう一方の翻訳法は、原作者を目標言語の世界へ引き入れ、目標言語使用者に変貌させるものである。これは、原作者が目標言語の使用者として初めから目標言語で書いたような翻訳であるとされる。)

アドルノの論は、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)が主張する逐語訳とはどのようなものかを知るために参照した。ベンヤミンが「翻訳者の使命」(1923/1996)という論考において翻訳者の使命を全うする方法として挙げる逐語訳とは、どのような方法であるかについての解釈を試みたのである。ベンヤミンとアドルノの論を合わせて考えると、目標言語は逐語訳によって変容し、それは具体的にはパラタクシスの技法による総合文の並列であると推測できた。つまり目標言語の文章構造を打ち壊し、そのことで意味を変容させる働きを翻訳(逐語訳)は持ち得ると考えられるのである。

現代の哲学者クレポンと哲学者・思想家であるデリダの論における翻訳は言語に関する現象と表せるものであり、翻訳を母語との関連から考察したものである。両者の論において翻訳とは、言語が形作られる現象であると説明されていた。翻訳によって言語が破壊され変容し、またそのことで母語というものが成り立つ、そして変化していくということである。母語は同一性の拠り所として機能しているかのようなのであるが、実は確固としたものではなく常に乱される可能性をもったものであり、そのような母語の変化が翻訳によって引き起こされる。両者の論は翻訳の破壊的性質を、母語を変容させるものと、さらには母語と自己同一性の関係をも変容させるものとするのであった。

以上の論から翻訳の破壊性というものが、様々であることがわかったが、各論に共通して挙げられる特徴として、それが否定的なものではないということがあった。例えば、目標言語を発展させる原動力であるし、また母語を形作る重要な働きをするものなのである。このように翻訳の破壊性という側面を複数の角度から論じることができた。

研究成果の概要 つづき

またシュライエルマッハーやゲーテ、ベンヤミンのほかにもドイツロマン主義者の翻訳論に注目し、フランツ・ローゼンツヴァイク (Franz Rosenzweig) に焦点を当てた研究も行った。そして、翻訳のもつ可能性としては、題材が同じであっても原文(起点テキスト)と訳出物(目標テキスト)をどのように対応させるかによって異なる目標テキストを生み出すということを考えた。

ドイツ語への聖書翻訳をマルティン・ブーバー (Martin Buber) と共に行なったローゼンツヴァイクの翻訳法について、先行してドイツ語へ聖書を訳したマルティン・ルター (Martin Luther) と比較しながら述べた。16世紀始めのルターの訳は、当時のドイツの一般民衆が聖書を読めるようにと、逐語訳を避け明瞭な言葉に訳出したものである。それに対し、20世紀のローゼンツヴァイク・ブーバー訳は、原典に忠実に起源に立ち戻るように訳することで、ルターによって作られた聖書の翻訳の伝統を変えるものであった。こちらは、読みやすさよりも異質さを強調するものということである。2種類の聖書翻訳が、同じテキストの翻訳であっても、起点・目標テキストをどのように対応させるかによって大きく異なる目標テキストを生み出すことを論じることができた。また、ローゼンツヴァイクらの翻訳は、目標言語・文化に異質さを持ち込むものであったことから、ローゼンツヴァイクらが翻訳に言語や文化を変化させる力(先述した破壊性と表せる性質)を見出していた、あるいはそのような力を期待していたことがわかった。

以上のように 2007 年度に行った研究は、文学作品の翻訳の持つ可能性として、何かを変容させる力、破壊性を見出すものであった。この研究によって、翻訳という行為・現象を捉える為の視野が広がり、また今後の研究のための土台となる翻訳行為・現象の捉え方が確保できた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①
齊藤美野, 「『翻訳』の破壊性, あるいは変容の力」, 『異文化コミュニケーション論集』, 6号, 2008年, pp. 47-58

齊藤美野, 「起点・目標テキスト対応の方法」, 『翻訳研究への招待』, 2号, 2008年, pp. 93-100

④ (学会発表)

齊藤美野, 「ドイツロマン主義者の翻訳論: F. ローゼンツヴァイクに焦点を当てて」, 2007年9月, 日本通訳学会第8回大会